



「無茶しなはんな。しゃあない、売りますがな」

「ほな、確かに二両で買うたで」

四、五日後、この油屋、茶金さんの店へやってまいりまして、茶金さんに茶碗を見せます。

「茶金さん、この茶碗見とくなはれ」

「どなたか存知まへんが、こらどこにでもある清水焼の、それも一番安手の茶碗どすがな」

「ほんまか」

「はい、何でもない、ただの安もんの茶碗どす」

「ほんまにほんまか」

「疑い深い人ですな。ほんまにほんまどす」

「あ、そう……こら茶金」

「ちゃ、茶金……」

「そうじゃ。しょうもない茶の飲み方さらすな」

「しょうもない茶の飲方で……」

「四、五日まえ、音羽の滝の前の茶店で茶あ飲んでたやろ」

「へえ、そうでしたな」

「飲み終わってから、この茶碗をせんどひねくり回して『はてな?』ちゅうて出ていったやろ。天下の茶金さんがひねくり回した茶碗や、こら値打ちのあるものに違いない。茶店の主人と『売れ』『売らん』で大喧嘩の末、やっと二両で手に入れたんじゃ。それが、ただの安もん?ほな、何であんなしょうもない飲み方さらしたんじゃ」

「ああ、この茶碗どしたか。あの時お茶をいただきとりましたら、ポタポタと漏りますので、傷でもあるんかいなと調べてみたが、傷もなければ釉薬にも支障はない。そやなのに、ポタポタ水が漏る。おかしいな『はてな』とな」

「えっ、それ水が漏るんでっか。傷もんでっか……それで……は、はは、はははは……値打ちもんやなしに、傷もん。はははは、笑うてなしゃあない……さよか、えらいすんまへん。大きな声出してしもて。面目ない、堪忍しとくれやす。ほな、ごめんやす」

「ああ、ちょっと待っとくなはれ。失礼ですが、確かに感違いですけど、茶金の名前を二両で買うていただきましたようなもんです。茶金、商人（あきんど）冥利につきます。あんたに損はさしまへん。その茶碗、私が買わしていただきます。元値の二両に、足代を一両足して三両で引き取らせていただきます」

「アホなこと言いなはんな。わたいが勝手に博打打って目が出んかっただけやちゅうのに……へえ、さよか……えらいすんまへん。あの二両はわたいの全財産でしたんや。おおきに、ありがとさんでした」

逃げるように帰っていきます。

さて、茶金さんともなりますと、高貴な方へも出入りをされます。しばらくして、関白鷹司公のお屋敷へ参りますと

「茶金よ、近頃世情に面白き話はないか」

「先ごろ、手前どもで、かようなことがございました」

「それは面白い、麻呂もその茶碗が見たい」

すぐに茶碗が届けられます。お茶を注ぎますと、やはりポタリポタリ。調べて見ても、傷もなにもない。

「面白き茶碗である。料紙を持って」

筆を取り上げられますと、サラサラと歌を一首

『清水の音羽の滝の音してや 茶碗もひびに 森の下露』

面白い一首が添えられまして、戻ってまいります。

京では、たちまち、この茶碗の話で持ちきりとなります。

と、これが時の帝のお耳にも入ります。

「いちど、その、茶碗が、みたい」

やはり、ポタリポタリ。

「面白き茶碗である」

筆をお取りになりますと、箱の蓋に万葉仮名で『波天奈』と箱書きが座ります。えらい値打ちもんになって戻ってきました。

これがまた大評判となり、これを聞いた大阪の鴻池善右衛門が、千両という高価で買い取ります。

茶金さん、油屋を探し出して、半金の五百両を与えます。

それから、四、五日して、茶金さんの表の方で大きな声がします。

「何事や」

と表へ出てみますと、大勢の人が『ワッショイワッショイ』と、何やら重たいものを担いでくる様子。よう見ると先頭で音頭をとってるのが、こないだの油屋で

「これ、油屋さん、何してますのや」

「あっ、茶金さん、今度は十万両の儲けでっせ……水壺の漏るやつ、見付けてきましたんや」



るの邪魔くさいがな。ここは、わたいの強いところを見せたらと思て、横手にあつた、幅が二メートルもある大きな岩をひよいと小脇に抱えて」

「ちょっと待て、幅が二メートルもあるような岩が、小脇に抱えられるかい」

「あんた見てへんさかいに、そんな事言うてまんね。それが木曾名産ひょうたん岩ちゅうて、真ん中のところが、こう細うなつて」

「ようそんな都合のええ岩があつたな」

「その岩をちぎつては投げ、ちぎつては投げ」

「岩がちぎれるのか」

「出来立てや」

「餅やがな、まるで」

「強盗共は、瘤だらけになつて逃げていきよつた。ホッと一息ついているところへ、一難去つてまた一難や。向こうにパツと土煙が上がつた」

「こらこら、鼻をつままれても分からん暗闇の中で、何で、土煙が見えんね」

「ちょうど、おっ月さんが出てきた」

「都合のええ時に出てくんねんな」

「何かいな、と思たら、猪や。これが四、五メートルもある大つきな奴やがな。そいつが牙を剥きながら、こっちへ突つ込んで来まんね。こんなもんにつけられたら命が無い。で、前にあつた木にスルスルスルと昇つたんや。ところが、猪も考へてまっせ。今度はその牙で、木の根元をゴンゴン突きよるさかい、木がグラグラ揺れて、危ない危ない。こんな気の揉める話はないで」

「洒落ばかりやな」

「振り落とされそうになつたさかい、今度はこっちから攻めたれ、思て、狙いすまして、猪の背中へポーンと飛び降りたんや。ほたらあんた、猪に首が無いのや」

「何でや」

「後ろ向きに乗つてんね」

「そら、首は無いわな」

「猪がびっくりして、暴れだしよつたんで、振り落されんように、何ぞ掴まる物はないかと見ると、ちよど目の前に尻尾があつたさかい、そいつをこう、掴んで、ドウドウドウ！」

「おいおい、猪の尻尾言うたら、こんな短いもんやね。両手でこんな事、できるかい」

「それが、だんだん延びてきた」

「ゴムやがな」

「猪、ますます暴れよるさかい、振り落とされたらかなわんがな、今度は胴体にしがみついたんや。と、その拍子に、わたいの手が猪の脇の下へスッと入ったんや。ほたら、猪が、急に、へナへナとへたりこんでしまいよんね」

「何でや」

「こいつが、こそばがりの猪で、わたいの手が腋の下を触ったもんやさかい、こそばがとんね」

「そらまあ、猪でも腋の下はこそばいやろな」

「こら、しめた、と思てな。今度は、両手で脇の下をコチョコチョコと、やったったら、猪の奴、よっぽどこそぼかったんやろな。転げまわって笑いよんね」

「猪が笑うんか」

「笑いまんね。『イーノ、シッシッシッシ』で」

「猪が笑うて、『イーノ、シッシッシッシ』か。そのまんまやないかい」

「で、猪の奴、笑い過ぎて、気ィ失うてしまいよった。こんな奴がまた目覚ましたらうるさいがな。今のうちやて、こいつの前足と後足を掴んで、前の谷底へバーンと放りこんだつたんや」

「ちょっと待て。その猪は、四、五メートルもあるんやろ。なんで前足と後足に手が届くね」

「あんた見てへんのにそんな事言うたらあきまへんで。こいつが猫背の猪でね、こういう具合に丸うなって四、五メートル」

「ええ加減にしとけ」

「ところが、今度は、その猪の子供が出てきましたんや。短い牙を剥きながら『親の仇、勝負！勝負！』ちゅうて。柔らかい牙で足元をコチョコチョココチョコ突きよるさかい、もうこそばいこそばい」

「今度は子供か」

「それが、次から次へと出てきまんね。何匹おったと思います？」

「知るか！そんなこと。で、何匹おつたんや」

「ししの十六匹」

(次回は、「蛸坊主」と「死ぬなら今」)